The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞島津忠夫著『和歌文学史の研究　和歌編』
Author(s)	中村, 友美
Citation	語文. 1999, 72, p. 50-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68946
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

島津忠夫著『和歌文学史の研究　和歌編』

中村友美

「私の和歌史の構想は、和歌の展開を現代短歌まで視野に入れて、一貫してその流れを追求したいというにある」（序章―和歌史の構想）。ここには、著者の和歌文学史の研究に対する姿勢が明確に打ち出されている。まさにこの構想にそった形で、島津忠夫氏の長年にわたる和歌史に関する研究がまとめられ、『和歌文学史の研究』の大著として刊行された。すでに発表された旧稿を改稿、補訂し、さらに新稿を加えての編集で、序章に「一和歌史の構想」「二和歌から短歌へ」を置き、「和歌編」には「一万葉から古今へ」以下近世和歌まで、時代を追って、三十九編の論考を収める。

「四『拾遺抄』から『拾遺和歌集』へ―異本拾遺集をめぐって―」は、もとは『国語国文』（昭和三六年二月）に発表されたもので、異本系統の一本である伝伏見院筆多久市立図書館蔵本を紹介し、『拾遺抄』から『拾遺和歌集』への成立過程の中間に異本『拾遺和歌集』を位置付けた。この論は、現在でも認められるところであり、また、その後の『拾遺集』の伝本研究の活性化を導いたという点でも、見過ごすことのできない論考である。

専門である中世和歌についての論考は、さすがに多数収められる。その中で「十九『百人一首』論考」では、(1)『百人一首』の成立―私見の軌跡―」(2)『百人一首』の背景―歌仙絵との関係をめぐって―」(3)『百人一首』の女流歌人」(4)『百人一首』の性格―定家の撰歌意識を中心に―」と、氏の百人一首研究における現在の見解、またそれに至るまでを、まとめて把握することができる。(1)では、氏の『百人一首』成立の見解の変遷とともに、諸氏の成立論についても簡潔にまとめられている。もとは『百人一首』（角川文庫　昭和四四年、改訂版昭和四七年）の解説に述べられたものだが、この訳注そのものも、撰者定家という立場に焦点をあてて解釈された、特徴的なもので、現在も高い評価を得ている。

旧稿を補訂するだけではなく、新稿として「二十二鵜鷺系歌学書の成立と展開―冷泉家時雨亭文庫蔵本の出現から―」では、氏が解題を執筆している冷泉家時雨亭叢書第四十巻『中世歌学集・書目集』において、『愚見抄』・『三五記』（上）・『桐火桶』の為秀自筆、もしくは自筆の存在が想定される本が出現したことから、鵜鷺系歌学書の成立について、再検討を加えられている。この本の出現の意義については、今後さらに検討されていくべきであろう。

和歌とともに、氏のもうひとつの専門である連歌と関わる「二十八『ささめごと』と数寄」のような論考も収められ、また、近世和歌についても「三十四近世和歌の流れ―三十年刻みによる概観―」によって流れを示し、「三十八近世和歌の連作―近代短歌への架橋―」では近代短歌へのつながりをみる。近年急速に進展しつつある研究領域であるが、早くからこの分野の重要性に注目し、現代短歌まで見据えた氏の論は、今後の研究の布石ともなるであろう。

一本一本は細部に切り込んだ論考だが、広い研究領域を有し、自身歌人でもある立場から、古典和歌から現代短歌まで、和歌文学史として見通した上での論であり、極端に細分化する現在の和歌文学研究の、指針となるべき書といえよう。（一九九七年六月、角川書店、八一七頁、三三、六〇〇円）

――本学大学院博士後期課程――